

目的：ファッションの多様化、複雑化の中で被服の図柄に関する考察は重要である。今回、前報に引き続いて被服の図柄の基礎的課題として縞柄の見えについて電子シャッター式タキストスコープを用いて、縞柄の色・太さ・方向の変化について検討した。サンプルは、斜め方向の縞柄である。

方法：サンプルは、黒・赤・緑・青の4色の色紙（日本色彩研究所製作）をもとに作られた「太」「細」の2種類の太さによる縞柄を、斜方向線（左下・右下方向）に構成した計16種類のパターンを35mmカラースライドにしたものである。実験は、これらの刺激を用いて、1 msecより30msecまで、10種類の露出時間による考察を行った。

結果：色についての判断は露出時間に伴って改善されたが、刺激の色によって判断に差がみられた。すなわち、黒と赤と緑は露出時間が5msecの段階より正答率が高く、露出時間の増大に伴う判断の変化はほとんど認められなかった。それに対して、青は短い露出時間では誤答数が多く、露出時間の増大に伴って誤答が顕著に減少した。そして、各色とも露出時間15msecから4つの色の間で判断の成績に差異がなくなった。太さと方向については、露出時間が最も短い1msecの段階で、ほとんど正答で、露出時間の増大に伴う判断の変化はほとんど認められなかった。しかし、判断が困難であった青については、露出時間が1～11msecの間の条件下では、細縞より太縞の誤答率が少ないのが目立った。